

退職者のひとこと

研究所入所の頃

私は1974年4月1日に奈文研に入所したのですが、同時期に採用されたのが、百橋明穂・岩本正二・川越俊一各氏と東北大学から転任した須藤隆氏でした。私の勤務場所は平城宮跡発掘調査部考古第3調査室で、室長は森郁夫氏、室員は岡本東三・金子裕之・須藤隆の各氏でした。この年の4月から埋蔵文化財センターが設置され、1975年の3月からは飛鳥資料館が開館するという、奈文研の組織が最も拡大しているときでした。この考古第3調査室は瓦の調査室なのに、1974年の3月末まで岩本圭輔氏、4月11日まで松沢亜生氏が室員でいたため、4月初頭の段階では、松沢氏が作った石器が考古第3の部屋中に積まれて置いてあり、また岩本氏も時々顔をだしては、細石刃などを作っており、旧石器研究室のような外観を呈していました。私は卒論・修論とも旧石器をテーマにしていたので、直ちに松沢氏に弟子入りした格好となり、瓦の部屋の新人としてはダメな人間として出発した訳です。この時、瓦部屋の森郁夫氏は室長として最も気合いの入った時期であり、瓦部屋の研究会を主催し、毎回のごとく自説を発表していました。この情熱が、岡本・金子・須藤そして松沢氏までも、何らかの形で瓦の論文を書かせる原因となったものと考えられます。

奈文研での1年目の発掘は薬師寺西僧坊でおこないましたが、私が瓦を調べようと思ったのは、西僧坊間仕切り使用瓦が平安時代の復古瓦ではないかと思い、平安時代の瓦を編年しようと考えたことがきっかけです。この復古瓦という発想は、西僧坊の発掘中に、私が発掘現場から瓦の部屋に帰ると、こんな、いい瓦が出土しているといって、森郁夫氏が瓦部屋で食べ物を用意して待っていてくれたことがきっかけでした。本薬師寺から運ばれた完形の軒瓦です。2日後、私は発掘中に完形の瓦を見て、あっ、古い、いい瓦だ！と言ったのですが、発掘担当室長の岡田英男氏は、これは、明治の修理瓦と、ひとめ見ただけで言い当てました。泥を取ると、たしかに明治三十三年森田仙助と印が押してあるのです。自分の眼力の無さを恥じました。奈文研で第2の師匠に出会ったのです。 (副所長 山崎 信二)

奈文研30年

1976年入所以来、途中、奈良市にいた3年間を除けば、ちょうど30年ということになる。その間、平城、藤原、飛鳥資料館、埋文センター、企画調整の各部署を経験させていただいたのであるが、「それぞれ、いついたの」と尋ねられると、自分のことながら、あやふやな答えしかできない。人間の記憶というものは、なんといい加減なものなのか、それとも個人的な問題なのであろうか。



前列左から、西村管理部長、千田上席研究員、山崎副所長、山中文化遺産部長
後列左から、小林企画調整部長、飯田業務課専門職員、西口考古第二研究室長

奈文研は昼夜のサッカーが盛んで、入所すると、何よりもまず足の大きさを聞かれる、というまことしやかな噂を耳にしていたが、私の場合は、なんのまえふりもなく突然、「お前は青だな」であった。これは予想外のことであって、サッカーのチーム分けで青チーム、ということを理解するまでにいささかの時間を要したことは言うまでもない。また、3ヶ月にも及ぶ発掘現場を乗りきる体力を養うためにも、昼夜のサッカーはもってこいであるとも言われた。入所2年目から3年目にかけて、平城で1～3月、現場班の編成替えで引き続いて4～7月、さらに、飛鳥藤原へ異動して12～3月と、数多くの発掘現場を経験することができたのも、きっとサッカーをしていたおかげであろう。もっとも、サッカーでは、おでこを切ったり、頭を縫ったり、いろいろとお騒がせしたのであるが…。思えば、それぞれ前厄、本厄の年であった。因みに後厄の年は、奈良市へ異動したので、怪我する機会は失われた。

奈文研では、何度か出入りした平城が一番長かったのであるが、いずれも、土器を避けた異動であった。入所して新人研修を受けていた頃に、「お前、土器の図…、まあ、ええわ」と言ったT部長の一言が思い出されるのである。それはともかく、もともと、それほど器用でもないので、自分でやってみることが好きで、学生時代にはタガネを作り、遺物と同じように、文様を彫ったり透彫をしたりしていた。そういうわけで、奈文研で飛鳥寺出土挂甲の復原に携わることができたのは、望外の幸運であった。また、弓矢を作り飛ばすこともした。実際に作ってみると、頭の中で考えていた通りにはいかないことが、逆に思いもよらないことがわかつたりすることがあり、結構「どきどき、わくわく」しながら進めたものである。

こんなことを書き続けていると、今度は「お前、研究所の仕事…」と言われそうである。「まあ、ええわ」と言ってお許しをいただきたい。30年間、お世話になりました。（企画調整部長 小林 謙一）

私がしてきた仕事

70年安保闘争など学生運動のうねりの中で、新たな世界を展望する歴史学への思いを抱きつつ奈文研に入所してから、38年が過ぎる。その間、私が携わってきた仕事の一つに、官衙遺跡発掘技術の向上と

情報の共通化の推進がある。それは第一に、1970年代以降に官衙遺跡の発見例が増加し、その調査研究が注目され始めたこと、第二に、柱穴をいきなりの半截・完掘して貴重な情報を抽出できていない現場が多かったこと、第三に、最新の知識・技術や調査成果が共有されず、発掘方法や遺跡の保存対策に苦慮している状況があったからだ。

こうした状況を改善すべく、官衙研修や調査助言、情報のデータベース化と公開、『古代の官衙遺跡』の編集などをおこない、また、古代官衙・集落研究集会を通じて、各地の調査員や研究者との情報交換やネットワークの構築なども図ってきた。このように、文化財行政に資する研究課題を自ら設定し、それに取り組める環境を与えていただいたことに感謝したい。

官衙遺跡はなかなか自らの正体を明かしてくれない。その正体を見破る万能試薬の調合もままならないから、遺跡の性格を早く的確に判断することは容易でない。一方、そのようにやっかいな遺跡だけに、官衙関係遺跡との対話は、謎解きや未知との遭遇という楽しさを味わえる世界でもあった。また、官衙遺跡は律令国家の成立や変遷を探るうえで重要な位置を占めているから、学生時代に抱いた歴史学的国家論などへの熱い思いを呼び覚ましてくれる機会でもあった。その意味では大切な人に巡り会ったようなものだ（奈文研では、人生の伴侶となる人にも巡り会っちゃったのだが）。

この仕事は、諸先輩が培ってこられた資産や同僚など皆様の協力のお陰で進めることができたことは言うまでもない。しかし、奈文研の資産に38年間の利息を付けて恩返しできたのか、甚だ心もとない。

膨大な集落遺跡の資料を歴史資料として生かし、その発掘の意義を市民に示すことなど、国内にも文化財行政に資すべき研究課題は山積していると思う。今後は皆様のご活躍を一市民として見守りたい。

（文化遺産部長 山中 敏史）

四十年と、ちょっと。

「お帰り」と、憶えていてくれる人もあるって、2007年4月、わたしは20年ぶりに「奈文研」に帰ってきた。庁舎も築何十年の貴緑に、ますます風格を増し、「まだ、そのままやったんやなあ」と、それにも妙な感懷があつたり、あのころは会計課といった